

## あとがき

正直最初は、とんでもないことを引き受けてしまったと悔やんだ。何しろ、野辺地町に関連する文学作品や作家を発掘し、紹介して、その歴史的背景・文化的風土などを考察し、町民の興味や関心を喚起する本を作りたいという大それた企画だ。それも七月の第一回目編集委員会をスタートに、年度内に出版するというのだ。そもそもしも一口に文学といっても範囲は広いし、野辺地関連の作品や作家のピックアップだけでもたいそうな仕事になりそうだった。それをさらに分類し、各分野での執筆者を探す……。考えただけでも気が重くなった。

しかし、いざ走り始めてみると図書館職員その他関係各位の協力の下、ばたばたと資料収集やら人選やら決まってく。さらに盟友野沢省悟氏の協力も得て、ようやく編集作業も現実味を帯びてきた。

野辺地は「文化の町」だ。今まで

も漠然とそんな気はしていた。この小さな町にしては公民館のサークル活動は花盛りだし、街中を歩くと、あちこちインテリじいさんやらインテリばあさんがいて、カラオケでシャンソンなど歌っていたりする。あるいはグラフィックデザインのプロが人知れず孫請けした都会の大きな仕事をこなしていたり、日本に数人しかいない錠前師が警察に協力して働いていたりと、何か一芸に秀でた人が潜んでいる町なのだ。だからこそ、こんな大それた企画なのに、人が集まるにつれどんどん形になっていく。それがこの町の底力だと思った。

かつて、明治末から大正にかけて松本彦次郎や中市謙三など名だたる人々が「野辺地学生会」を結成してさまざまな知的活動を行った。このあたりの顛末は高松鉄嗣郎氏の著作「文人中市謙三の生涯」に詳しい。現代に至ってもなお野辺地が内包する知的遺産の原点

かもしれない。

ただそういつた遺産ともいえる伝統も先頃はやや廃れつつあるように見受けられる。人口の流出や高齢化によつて、一つまた一つと失われていくのは悲しい限りだ。野辺地町の誇り高い伝統も黙っていけば消滅しかねない。願わくはこの企画を通して、かつての野辺地町に花開いたインテリジェンスにあふれた文化を取り戻すきっかけにでもならんことを。今回は文学という切り口からそんな野辺地の風景を垣間見ることができた。みなさんもこの小さな一冊から、それを少しでも感じ取っていただけたら、それだけでもこの事業を遂行した意義は充分である。

ただ、今回の企画で野辺地に関わる文学をすべて取り上げられたい。とりあえず、図書館で調べられるだけ調べていただいたが、時間の制約はいかんともしがたい。ある程度つかんだ上で全体を構成していったつもりだったが、先述の高松氏の著作ですら、まさに抜け落ちていたのだ。いきなりの

原稿依頼に応えていただいた佐々木達司氏には感謝してもらいたくない。おそらくこの本が上梓された後にこそ、読者諸氏のご指摘から本当の野辺地の文学の全貌が見えてくるかもしれない。それを甘んじて了解した上で、とりあえずの暫定的なまとめとした。

それにしても、たいへんな作業になった。もつともつと時間をかけて練る必要もあったのかもしれないが、編集委員諸氏の労苦と、舘田勝弘先生をはじめ短期間での執筆にご協力いただいたみなさまには紙面をお借りして感謝申し上げたい。

また、企画を発案し、編集作業を推進してきた図書館関係各位の熱意と尽力にも舌を巻いたことを告白しておく。それと紙面全体のデザインとレイアウト、および版下作成を忙しい仕事と格闘しながら担当していただいた上野田恵子氏にも感謝しなければならぬ。

平成二十六年三月

編集委員長 今井 實人